

瘤取話 —その広がり—

鈴木 満

話型番号はAT五〇三「小さい人々の贈り物。小人たちが僂僕せむしから瘤を取り、それを他の男にくつつける。」
(AT503 The Gifts of the Little People. Dwarfs take hump from hunchback and place it on another man.)¹⁾

〔一〕

近世になって考証随筆が夥しく書かれたうちでも、喜多村信節のぶよの『嬉遊笑覧』はまさしく江戸時代の百科全書ともいふべく、これを早くから入手していたのに、ろくすっぽ読んでいないのははなはだ不勉強と、今になって後悔している。同書は、口承文芸関係でも「言語」門に、「かちかち山」・「瓜子姫うりこ」・「桃太郎」・「鬼ヶ島」・「舌きり雀」・「酒顛童子しゅてんどうじ」・「花咲か爺」などの昔話の考証を含め、嘶の世界全般にわたって要点を押さえているのは脱帽する。付録の「或問わくもん」はまさに雑纂で（従ってどういふ事項が所収されているかは全てに目を通すしかないが）、ここにも「瘤取り」の話がある。まずその紹介からこの一文を始めよう。

「鬼に疣をとらる」(疣はイボを表す漢字だが、左の小話の筋から、コブを示していることは明らかである)と欄外頭書きに続き、『著聞集』に「鬼に疣をとられたる話あり」と記されている。(しかし、橘成季撰『古今著聞集』には該当がない。作者未詳『宇治拾遺物語』にはある。三 鬼に褌被取(取られし)事」がそれ。これは後に詳述する)。次いで『笑林評』の記事を、「これと全く同じ」として載せている。

原漢文を讀み下しにしてみる。

一人頂あるひうぶじに縣疣けんゆう有り。涼りようを取るに因りて夜廟ひやう中に宿す。神、此れ何人ぞ、と問う。左右、答えて云わく、氣毬ききうを蹴る者なり、と。神其の毬を取り來たることを命ず。其の人疣を失い、踴躍ゆうやくに勝えずして出ず。次ぎの晩、復疣また有る者來たりて廟に宿す。神、前の如く之を問う。左右乃すなわち以て毬を蹴る者とす。對こたえて神曰く、昨の毬將むか他に還すべし、と。其の人旦あかつきに至り竟つひに両疣を負いて去れり。(評略)。

次に試訳を記す。「――」内に解説を付した。

首に瘡がぶらさがっている男がいた。涼もうとして夜お社やしろに泊まった。社神が、あれは何をする者か、と訊くと、社神の左右のお付き(脇侍・従者)が、蹴毬けまりをする者でございませ、と答えた。社神は、それでは毬を取つてまいれ、と指図。男は瘡が無くなつたので大喜び、手の舞い足の踏むところを知らずというありさまでお社をあとにした。翌晩、また瘡のある男が来て、お社に宿つた。社神が前と同様、これは何か、と問うと、左右のお付きの者が、やはり蹴毬をする者、と言う。すると社神がのたまうには、では昨夜の毬を(将は「(まさに)……を」という介詞か)かやつに返してつかわせ、と。この男は朝になると結局瘡を二つぶらさげて出て行くはめになつた。

『笑林』は後漢の邯鄲淳（二三二—？）撰の笑話集であるが、原書は今日無く、二十三条が遺るだけ、と言う。『笑林評』は唐代この二十三条に楊茂謙が評を加えたもの。完全に同じ話が明の馮夢竜（一五七四—一六四五）撰『笑府』にある。『笑府』は清代に遊戯道人なる者に改編されて「笑林広記」と改められた。原本は中国には伝わらないが、日本にも舶載され、平賀源内により抄訳されている、とのこと。⁶

蹴鞠、つまりけまりは日本では上つかたの遊戯とされたが、『水滸伝』やら『金瓶梅』やらを読むと、かの国では高貴な身分の人たちばかりでなく、幫間のたぐいの雑技でもあったようだ。漢代にしてすでにそうであったとすれば、その辺の男が毬を携えているから、これは蹴毬を業とするやつ、とした社神（土地神とか城隍神）の左右に侍立している家来（これも神様同様土偶か何かである）の観察も無理はない。

(二)

さて『宇治拾遺物語』である。成立は十二世紀終わり頃。治承四年（一一八〇）—建久六年（一一九五）の間。以後多少の加筆あり。作者は未詳。校注者中島悦次氏の記述をそのまま引用すれば、「大和物語とか古本説話集とかいう類の短編物語作家が、説話的興趣にひかれて筆のまにまに説話を雑纂した書と見るべきであろう。」とのこと。⁷これに収録されているその三「鬼に褰被取事」（鬼に褰取られし事）は民間に伝えられていたのである。瘤取話を材料として、みごとに文学にしあげている。ストーリー・テラーとしての才能にはつくづく感嘆する。これが漢文、あるいはラテン語で同時代に発表されていたら、漢文化地域、あるいはラテン語文化地域を驚倒させ、今にいたるまで特記されていることであろう。この小論はいかにこれが傑作かを特筆大書するのも目的の一つである。しかしとりあえずまず瘤そのものの論議から。

尙(く)瘻病による背中の瘤のモティーフは、中国にも日本にも朝鮮にも無い。

既に言及した『笑林』では項(く)に瘤がある。これには瘰癧(れいぎ)、つまり結核性頸部リンパ腺炎による頸部片側の脹らみか、甲状腺異常による頸部前側の脹らみが考えられる。前者の場合、進行して破裂すればリンパ液が流れだして、痛みもなく脹らみは消える(もとより治癒したわけではないが)。甲状腺が腫れる病気ではあるが甲状腺の機能そのものには異常がなく、それ自体としては命にかかわる病気ではない単純性甲状腺腫には、一例としてヨードの摂取不足が原因となる地方性甲状腺腫がある。大陸の内陸部や山岳地帯の風土病として世界的にさまざまな地域で見られたし、見られる。

瘻は頸部の瘤を表す漢字である。『宇治拾遺』の未詳の作者が意図して最初からこの字を用いたとすれば、やはり瘤は頸にあつた、と考えられる(もつとも後述(二三)の『醒睡笑』でも瘻の字を用いながら「目の上の瘤」の話とされているから、漢字からの詮索は無意味なようだ)。ところが原文では「右の顔に大きな翁(おきな)ありけり。」となつている。この「右の顔」(これを真似、結局もう片方の頬にも瘤をつけられてしまう「翁」は左の顔に瘤があることになつている)という記述から日本昔話「瘤取り翁」のあらかたでは、頬に瘤をぶらさげるようになったのではないか、と、民間伝承を文人が書物にした場合、それがまた民間へ強力な影響をあたえ、再び民間伝承の活力源になる、という事例を鑑みて、類推せざるをえない。さてさて、頬に瘤ができる、という病例はさして珍しくなかつたのだろうか。

なお、あの広瀚な『今昔物語』には同じ話型の説話はない。瘤をモティーフとしたものは、本朝仏法部卷第十五の第六「比叡山の頸の下にこぶある僧往生の語」があるのみ。比叡山東塔の僧だが、頸の下に瘤があり、年来医師の治療を受けていたが治らぬため、人交わりを厭い、やがて(東塔、西塔と並びやはり比叡山の三塔の一つである)横川(よしかわ)

のある峰に山籠もりしてひたすら念仏を唱え、陀羅尼だらに（尊勝陀羅尼・千手陀羅尼などの經の呪文）を誦して浄土を渴仰するうち、ついに瘤がなくなつた。しかし、これから東塔に帰つて寺務に従事しても残りの生涯はいくばくもない、と思い定め、さらに籠居を続けるうち、ついに天人の來迎らいこうがあつて往生した、という話である。

では本文の検討に移る。
粗筋を記す。

①右頬に大きな柑子うまじ（＝蜜柑）ほどのこぶのある翁。人交わりができないので、山に入って薪を採つて暮らしている。
②ある時山でひどい風雨に遭い、里に帰れず山中で一夜を明かす。中が空洞の樹に這いこんで恐ろしさに眠れもせずにいる。

③犢鼻褌たうまき（ふんどし）を締めた赤、黒、目一つ、口なしなどの鬼ども（鬼どもの姿形は、卷第一の一七「修行者逢百鬼夜行事（修行者百鬼夜行に逢ふ事）」や卷第二の二四「一條棧敷屋鬼ノ事」なども参照するとおもしろい）が百人ほど出てきて、老人がしゃがみこんでいる樹の前に座り、酒宴を始める。横座（上座）に頭立つ鬼が座り、残りは向かい合いにずらりと並んで、世の常の人間のような宴会ぶり（詳しい描写が笑いを誘う）。

④やがて鬼どもは舞をやりだす。頭立つ鬼は、いつにも増して楽しい遊びだが、ひととき優れた舞いかなでを見たい、と言う。翁は「物の付たりけるにや、又しかるべく神仏の思はせ給けるにや」（＝靈がのりうつつたのか、そのように神仏が思いつかせてくださったのか）、鬼どもの音頭に応えて、樹のうろから跳び出して舞い狂う。「木のうつほより、ゑほしははなにたれかけたる翁の、こしによき（＝斧）という木きる物さして、よこ座の鬼のみたる前にをどり出たり。（中略）おきな、のびあがりかがまりて、舞べきかぎり、すぢりもちり、えいごゑをいだして一庭を走まはりまふ。」

⑤鬼一同はすっかり感服。横座の鬼は、これからこうした遊びにはかならず参加せよ、と言ひ、翁も承諾する。しかし、相談役めいた鬼が、口約束だけでは守らないかも知れない、「質（＝担保）」をお取りになったらいかか、と進言。横座の鬼は、「こぶはふくの物なれば」顔のこぶを惜しむだろうから、それを取ろう、と言う。翁は表面ことばを尽くしてこれを否み、それに刺激された鬼は、いよいよ大切なこぶと思ひ込み、もぎとる。「大かたいたき事なし」。夜明けになり、鬼どもは去る。

⑥翁は、頬がきれいさっぱりつるつるになったので、喜んで帰宅。妻が訊くので、子細を語る。

⑦左の頬にこぶのある隣家の翁がこれを聞きつけ、自分もこぶを取りたい、と詳しく事情を問ひただし、説明を受ける。

⑧この翁は言われた通り樹のうろに入っている。鬼どもが来る。酒宴。やがて、「いづら、翁はまゐりたるか（＝どうじゃ、翁は参上したか）」の声に應えて、外へ出て、舞いを舞う。しかし、こちらはまことに不器用。

⑨横座の鬼が、「このたびはわろく舞たり。返々かたがへわろし。そのとりたりし質のこぶ返したべ（＝今度は下手な舞いぶりだ。つくづく下手くそだわい。質に取ったこぶを返してやれい）」と命じたので、末席から（こぶを預かっていた）鬼が進み出て、翁のもう片方の頬にそのこぶを投げつけたので、両の頬にこぶのついた翁になってしまった。

⑩「ものうらやみはすまじき事なりとか。」が結び。

さらりとした筋の運びをぜひ原文について観られたい。

（二）

江戸初期の笑話集安楽庵策伝の『醒睡笑』¹⁰にはこんな話が二つある。さらに参考としうる一話をつけ、三つ紹介す

る。いずれも短いので全文をここに転載するが、句読点を補い、濁点をつけ、振りがなを付し、また、漢字を開き、あるいは漢字に直し、送り仮名も補い、解説を「」内につけて、読みやすくしたことをお断りしておく。なお各巻の標題のあとに（ ）でくくって論者なりの訳をつけた。

〔イ〕〔巻一〕(謂被謂物の由来 (こじつけ語源説))

鬼に瘰を取られたといふ事なんぞ。目の上に大なる瘰をもちたる禪門(出家)ありき。修行に出でしがある山中に行暮れて宿なし。古き辻堂に泊まれり。夜すでに三更(子の刻。午後十一時から午前一時頃。一説に午前零時から二時とも)に及ぶ。人音数多してかの堂に來り酒宴をなす。禪門恐ろしく思ひながら、せん方なければ心浮きたる顔し、円座(藁、蒲、藺、萱で渦巻き形に編んだ円形の敷物。訓ワラフダ、ワラウダ。ここでは山仕事をする者、旅の者などが、山路・野路での休息のため木の切り株や石の上に腰を掛けるとき、保温の道具として臀部にぶらさげたいものか)を尻につけ立ちて躍れり。明けかたになり、天狗ども帰らんとする時いふ、禪門浮き(原文静嘉堂文庫では「よき」とある)藏主にてよき伽なり(この僧は陽気な浮かれ坊主で楽しい慰みになった)。今度も必ず来たれ、と。約束ばかりは偽りあらん、ただ質にししくはあらじ(口約束では嘘をつくということもありうるから、かたを取っておくのがいちばん)とて、目の上の瘰を取りてぞ行きける。禪門宝をまうけたる心地(すばらしい贈り物をしてもらった気持ち)し、故郷に帰る。見る人感じ、親類歎喜すること測りなし。

〔ロ〕〔巻六〕(推はちがうた (思い込みはずれ))

ある所に禪門目の上に大なる瘰を持てり。悲しきながらせん方かたなく過ごしけるに、人の語るやう、そこ(どこそこ)の里に住むなる老人、山路を通ふとて、道にて鬼に行き合ひ、年頃(年来)うるさかりし目の上の瘰を取られ、一門眷属までも悦びかざりなし、といふを聞き、あながちに(ひどく)是を羨み、はるばるとその人の許に尋ね

ら、再び民間の口伝えにもどることは容易に考えられるから、昔話の「瘤取り爺」型で、これを源としたものも少なくなからう。

おもしろいのは元来対となつて一つの物語を構成する「踊りが上手なため瘤を取ってもらつた（瘤を担保に取られた）老人のこと」と「それを真似てみたが、踊りが下手なため前の老人の瘤を（その老人と見誤られて）くつつけられた（担保の瘤を返された）老人のこと」が『醒睡笑』では引き離されて別個の話となつてゐることである。巻の編集内容にこだわつたためだろうが、民話の本筋を理解しているとはいひがたい。

しかし、大名と血縁（策伝は美濃国の名族土岐氏の流れで、飛騨国高山三万八千石の領主金森長近の末弟）のこの浄土宗西山派の僧侶は、同派本山の一つ誓願寺（京都有数の古刹）の五十五世法主を勤め、紫衣勅許を得る僧門の最高位を極めるなど、京の名流貴顕の一人で、言つてみれば近世初頭の第一流文化人である。『醒睡笑』で窺えるかぎりその機知・才気は時代を代表する傑出ぶりと言え、その時代の感覚で評価しないと当を失するであろう。『醒睡笑』八巻は周知のように京都所司代板倉重宗（このきわめて重要な都市における幕府公権力の代表）の請いに応じて、かねて耳底にたくわえ、また、人にも語り聞かせてきた笑話を八巻にまとめて贈呈したものが、これは相互に年々入魂な問柄だつたからで、同書奥書の重宗の文辞の敬語の用い方によつてもそれがわかる。なまなかのお伽ぎ衆のように権勢ある者にひきたてられ、その眷顧をかたじけなくした暫間的存在では全くなかつた。

〔四〕

日本の昔話「瘤取り爺」はどなたもご存じだろうから、ここでは類話の共通項を粗筋として箇条書きで記しておく。『日本昔話大成』による。

① 瘤のある爺さま。瘤がついているのは頬、あるいは額（宮城県登米郡、岩手県花巻市、北上市、遠野市、青森県三戸郡 ↑ 前掲書による。東北はこの型か）、あるいは部所不明。いずれにしても背中ではない。

② お宮、山、森など人里離れたところへ行く。握り飯、豆などを追って鼠穴などを通って異界へ出る、という形の話もある。

③ 歌い、踊る超自然的存在（天狗、鬼、獣、化け物）を見る。楽しくなって、あるいは一緒になるのがいちばんと考へ、仲間に入る。円座をぶらさげることあり。

④ 満足した超自然的存在は、再び来させるための担保として、あるいは、楽しませてくれた報奨として、爺さまの瘤を取る。他に宝をあたえることもある。

⑤ 瘤のある別の爺さまが、瘤のなくなった爺さまをうらやむ。あるいはもらった宝をもうらやむ。真似をして同じ場所へ行く。

⑥ 歌い、踊る超自然的存在の仲間に入るが、芸が拙いので、不興を買い、この瘤を持って行け、とくつつけられて帰る。

(五)

お隣の朝鮮半島にも類話が存在する。これも頬に瘤のある老人たちである。

ただし、編者崔仁鶴博士が「慶尚北道金泉市の林鳳順（五八歳）」によつて語られたこの話を記録したのは一九六八年とあるので、日本からの伝播・流入の可能性を否定できないのが残念である。比較口承文芸研究上きわめて興味深い資料を多数含む孫晋泰『朝鮮民譚集』（郷土研究社 一九三〇年）——改題されて『朝鮮の民話』（民俗民芸双書

七 岩崎美術社 一九六八年)——に当たつてみたが、残念ながら該当する話型は見出しえなかった。

箇条書きの粗筋を以下に記す。

①片頬に瘤のある爺さまが山へ柴刈りに行き、山中で日が暮れてしまう。藁小屋で一晩明かすことにして、怖さをまぎらわすために唄を歌いはじめる。

②気がつくときトケビがたくさん集まつて、爺さまの唄を聞いている。止めようとすると、どんどん歌つておくれ、と言われる。

③夜が明けると、^{かし。}頭のよくなトケビが、美しい声の秘密を訊く。爺さまはこの瘤のおかげだ、と答える。頭のトケビは、瘤と宝物を交換しよう、と提案。爺さまは承諾して、瘤を取つてもらつたうえ、宝物をたくさんもらつて帰宅する。

④隣村のやはり瘤のある爺さまがこれを聞いて、自分も瘤を取つてもらおう(宝物への欲心は記されていない)と、前の爺さまからよく教えてもらつて、同じ場所へ行き、同じことをする。

⑤夜明けがた、頭のトケビが、声の秘密を訊く。瘤のおかげだ、と話す。トケビは、前に取つた瘤のせいで、ひどい声になつてしまった、と怒り、以前の瘤を爺さまのもう片頬にくつつける。爺さまは両頬に瘤をつけて村へ帰る。

(一六)

モンゴルにも類話がある。これは斉藤君子編訳『シベリア民話集』収録の「こぶとりじい」⁽¹⁶⁾を引用する。編訳者によればトゥヴァ族(モンゴル人民共和国北西部サヤン山脈およびエニセイ河上流地域に住むチュルク語群の民族)の

もの。ちなみにこの地域で狩猟・漁労にたずさわってきた人々は、日本列島の住民と太古から交流関係が絶無ではなかったはずである。このような斉藤先生の訳業が彼我の民話の比較研究に光明をあたえてくれることを確信する。

「いぶとりじい」の粗筋はこうである。

- ① 貧乏な兄が金持ちの弟に援助を乞うが、弟は冷淡に援助を拒む。
- ② 貧乏な兄は、高い黒い岩と四方に枝を張った木の下に豊富な食べ物がある、という妻の夢の場所を探し、行き着く。
- ③ 六羽の白い鳥がここへ来て、美しい姫となる。そして、白い皮の器と、長い柄についた槌を岩の割れ目から取り出し、器を槌で打つと、食べ物を始め欲しい物が出る。
- ④ 姫たちが去ると、貧乏な兄は器と槌を取り出して帰宅。以後豊かに暮らす。
- ⑤ 強欲な弟は、兄夫婦が餓死していたら、何でもめぼしい物を取って来い、と召使を兄のもとにやる。とても裕福に暮らしている、と召使が帰って報告。弟は兄の家に来て、豊かになった秘密を訊き出す。
- ⑥ 強欲な弟は、高い黒い岩と四方に枝を張った木のところにたどりつく。やがて姫たちが来る。弟は生け捕って妻にしようとして綱を持って近づく。姫たちは器と槌が盗まれているのに気づき、捜し回って弟を発見、捕らえる。
- ⑦ 姫たちは、自分たちを妻にしようとしたという弟のことはに立腹。鼻をつまんで引き延ばし、次々にそれを結んで六つのこぶを作り、飛び去る。
- ⑧ 弟は六つのこぶのついた鼻となって帰宅。弟の妻は、兄に向かつて、直してくれば財産の半分を渡す、と約束。兄は槌を振って、次々とこぶを消してやる。最後のこぶになったとき、弟の妻は財産の半分をやるのが惜しくなり、槌で夫の頭を殴って殺してしまう。

これは汎世界的な昔話の一つ「白鳥乙女」のモチーフが混じっている。日本の昔話「一寸法師」で有名な打ち出

の小槌のモチーフもここに見えるのがおもしろい。

ただし、話型としてはいわゆる「瘤取り話」にはなっていない。白鳥乙女（天界から舞い降りた天女か）が、元来瘤のある男から瘤を取り、また別の男にそれをくつつける、というわけではないからだ。鼻に瘤というのはおもしろい。

〔七〕

西欧でこの手の昔話が文献で現れるのはようやく十七世紀のイタリアおよびアイルランドである。さまざまな点で文人の手が加えられている。以下いずれも『グリム昔話集注釈』（Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 以下BPと略す）¹⁷の記事に拠った。ただし括弧内は筆者の補綴。

*

一六四七年に刊行された『ベネヴェントの大婚礼の話』（De nuce maga Beneventana, Neapoli 1647 p.41）のなかで、ベネヴェントの医師ピエトロ・ピペルノ（Pietro Piperno）はこう語る。

背中に瘤を持つ靴屋のロムベルト（Lomberto）は、（ローマン・カトリック教会の大祭で、精霊降臨節——復活祭の五十日後——のあとの第二木曜日におこなわれる）ご聖体の祝日（corpus Christi）の前の宵（南イタリアの都市）ベネヴェントから自分の故郷の村アルタヴィラへと旅をしていたが、野原の川のほとりに一群の男女が踊っているのを見つけた。ロムベルトはこの人たちは牧草の草刈り人だと思ひ、おもしろがって仲間に入る。

この連中、楽しそうに唄を歌うのはいいが、これが

月曜日、火曜日、水曜日、

木曜日が来て金曜日、

の繰り返し。そこで靴屋がこうしめくくる。

そして土曜日、日曜日。

聞いた皆は大喜びで、一巡りする歌詞を歌って興に入る。踊り疲れた一同はやがて大きなクルミの樹の下で飲めや食えやと盛大に宴を催すが、そのうちこの夜の踊り手たちのひとりが出たかに靴屋の瘤をひっぱたく。すると瘤は背中から胸へとつるりと動いてしまう。びっくり仰天したロムベルトが「イエスさま、マリアさま」とさげふと、宴席の客はすべて食卓と灯火もろとも突然ふいと消え失せた。こいつはどうも魔女どもとかかわりあいになつてしまつたわい、と怖じ気づいた靴屋は急いで旅を続けた。白しら明けにわが家の扉をほとほと叩くと、女房は最初中へ入れるのをどうしても承知しなかつた。うちの亭主じゃない、と言いはつて。つまり瘤はもうきれいさっぱりロベルトの背中から消え失せていたからである。

それからまた。

*

フランチェスコ・レーティ (Francesco Redi) は一六八九年ロレンツォ・ベッリーニ (Lorenzo Bellini) 宛ての書簡のなかで、瘤を持った二人の男の話を紹介している (Opere 5, 228. 1778 = Imbriani Novellaja fiorentina 1877 p. 561)。

その一人の方は、悪魔どもがベネヴェントのクルミの樹の下でおこなわれている魔女のサバト (集会) に連れて行って、バターでできた鋸でその瘤を切り取り、(すりつぶしたアーモンドを砂糖で練つた菓子) マルチパンの膏薬で傷口を塞いでくれた。これを聞いて、おなじく魔女たちのところへ踊りにでかけたもう一人は、そこでおそろしくぶきつちよなふるまいをしたので、悪魔どもは罰として最初の男の瘤を地獄の (業火のもと) のひとつである (瀝青で彼

の胸に貼りつけてしまったそうなる。

この両話に共通する舞台、ベネヴェントのクルミの木は悪名高かったようである。魔物がその周囲に出没するという樹木は伝説で「呪いの木」と呼ばれる。

*

近世アイルランドの詩人トーマス・パーネルの詩「古代イングランド様式の妖精物語」(Thomas Parnell: 'A Fairy Tale in the Ancient English Style') は、同様のアイルランドの民間伝承を素材としたものだが、アーサー王の時代を借り、シエクスピアやスペンサーのお蔭で知られるようになった妖精の世界を舞台としている。

麗しの姫イーデイス (Edith) に二人の若い騎士エドウィン (Edwin) とトウバズ (Topsa) が求婚する。片方は背中に瘤があり、一方はすわりとした体つきである。自分の不具を悲しみながら、夜独りで廃墟になったとある城館のそばまでさまよって行ったエドウィンは、一群の小人たちが灯火を手にして近づいてくるのを目にする。妖精の王オーベロン (Oberon) は、親切に、エドウィンが何を悲しんでいるのか、訊ね、妖精たちの踊りに加わるよう命じる。そしてロビン・グッドフェロウ (Robin Goodfellow) が彼を天井めがけて投げ上げると、瘤はそこに貼りついたままになる。雄鶏が啼いて陽気な一団が消え失せると、エドウィンは瘤から解放されて、気も晴々と家路につく。けれども、彼のライヴアルのトウバズは、同じように妖精を待ち受けようとしたために、てひどいもてなしを受ける。つまり、天井に投げ上げられて、エドウィンの瘤をくつつけられてしまったというわけ。

*

伝承の宝庫中近東となると、文献でも時代はもつと遡る。

エジプトのカイロ生まれのモハメッド・ベン・ハサン・ベン・アリ・ベン・オトマン (Mohammed ben Hasan ben

Ali ben Othman) が十四世紀から十五世紀に生きた文人ナウエイギ (Nawéig) に語った古いアラビアの類話ではこうである。

ここではやはり、前出レーディやそれよりも後代の記録者におけるように、背中に瘤のある二人の男が語られているが、妖精や魔女の踊りとか、彼らがそれに参加するとかの話はない。代わって登場するのはアフリート (エフリート)。アラールと人間の間位に位する魔物・魔神。炎の精霊の一族。背中に瘤のある男が (寂れて人けのない) 公衆浴場で、独りで一杯やって愉快に唄を歌っていると、この魔物が建物の壁を突き破って侵入してくる (公衆浴場の廃墟のような汚穢に縁のある場所には、このような魔物が好んで跳梁した)。恐ろしい象の恰好をしている。ところが男は怖がるどころか、食事に加わるよう相手を招待する。魔物は喜んで、何か望みはないか、と尋ねる。「背中部の二つの瘤を厄介払いできりや、あたしや、嬉しいんですがね」との返事を聞いたアフリートは手でそれを撫で、両の瘤を (パーネルの詩にあるのと同様) 部屋天井に投げつける。そこで男はすらりとした体になってご機嫌で家に帰ることができる。それを聞いたもう一人の背中に瘤のある男が (浴場の) 同じ部屋で唄を歌う。しかしアフリートが壁から入りこむと、男は恐怖に怯えて黙りこくり、ぶるぶる震えているばかり。そこでかんかんになった魔物は、元からあった二つの瘤のうえにさらに例の陽気な男から取ってやった瘤を貼りつけてしまう。

〔八〕

グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話集』(Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 以下KHMと略す) にもちゃんと類話がある。

KHM Nr. 182. Die Geschenke des kleinen Volkes がそれ。ただし初版にも第二版にも無い。KHMに収録されたの

はずっと遅く一八五〇年のこと（ちなみにKHMの決定版、すなわち第七版は一八五七年）。それまで一八二番だった「えんどう豆の試験」（Die Erbsenprobe）を削除した代わりである。収録材料の原題は「山の精の贈り物」（B. Sommer: Sagen aus Sachsen und Thüringen 1. 82. Nr. 1 'Der Berggeistler Geschenk'）とある。

岩波文庫の金田鬼一訳『完訳 グリム童話集』では、二〇三番「こびとのおつかいもの」であり、角川文庫の関敬吾／川端豊彦訳『完訳 グリム童話』では一八二番「小人たちの贈り物」となっている。

粗筋はこうである。

仕立屋（寡欲で親切、かつ控えめな人物という設定。仕立屋は、メルヒェンの世界では「仕立屋七人で男一匹」などと不当な悪口を被ることもあったが、大体が穏やかな小男というイメージ）と金細工人（欲張りですうずうしい男という設定。ヨーロッパ中世、金細工人は金貸し業に従事することもあってか、民間伝承で悪役にされることが多い）が道連れになつて旅をしている。二人のうち後者だけが背中に瘤を背負っている。月夜、ある丘の上で小さな男女たちが唄を歌いながら輪舞をしているのを見る。輪の中央にいる他の者よりいくらか体が大きい、白髭の爺さんが、輪の中へ入るよう、無言で誘う。金細工人が先立ちで二人は小人たちが開いてくれたところから輪の中に入る。（唄や踊りに参加はしない）。爺さんはやがて腰の小刀を手に取り、二人の頭髮と髭をつるつるに剃り落としてしまう。それから傍らの石炭の山を指さして、それをポケットに詰め込むよう身振りをする。二人はその通りにして、また歩きだす。丘を下つて谷に入ると真夜中を告げる鐘が鳴る。唄はばかりと止み、何もかも消えてしまう。

宿を見つけて泊まった二人が翌朝目覚めると、石炭は黄金に変わっており、髪も髭も元通り生えそろっている。金細工人は欲を出して、もう一度丘の上へでかけよう、と言いだす。仕立屋は、これで十分、と答え、同行はしないが、おつきあいにもう一晚泊まることにする。

金細工人はいくつか袋を用意してでかける。同様のことが起こる。金細工人は袋に一杯石炭を詰め込んで宿に引き上げる。翌朝見ると、石炭は石炭のまま。また昨日の朝変化していた黄金も、彼の分は石炭にもどつてゐる。髪も髭も元通りではなく、つるつるのまま。それから背中の瘤と同じ大きさの瘤が胸にもついている。

仕立屋は、道連れなのだから、自分の黄金と一緒に暮らそう、と言う。金細工人は一生背中と胸に瘤をつけ、髪も髭も生えないで過ごした。

ここに出てくる小さい人々 (Kleines Volk) というのは、地面の下に棲んでいて年寄りの顔をしている小人でもないし、鉱山の坑道に出没して鉱夫をからかったり、稀には援助したりするたぐいでもないし、特定の家に住み着いて姿を見られないまま、なにかと家事を手助けしてくれる家の精でもなく、どうやらブリテン諸島や北欧の民話に出て来る小さな妖精たちと同じ存在のようである。ドイツ語ではエルフ (Elfe) だが、これは英語でもしかり。丘の上で月明に輪舞をする。また、森の中の一定の空き地で輪舞をする。輪舞したあとに茸が輪状に生える。醜くはなく、きまぐれであるが、決して邪悪ではなく、人なつくくもある。原題によれば山の精たち (Berggeist) とのこと。しかし、この連中はその居住環境や携わる労働のせいか、通常荒々しい性格なのだが。とにかく、歌舞を好む超自然的存在なら何でもよいのだから、ここであげつらっても始まるまい。

注

- (1) A T 五〇三 アンティ・アアルネ (フィンランド) / ステイス・トムブソン (アメリカ) 編『民話のタイプ』(Aarne, Antti/Thompson, Sitt: The Types of the Folktale) による話型番号。同書一七〇ページ。
- (2) 喜多村信節 一七八四—一八五六。江戸末期の国学者・考証家。字は節信。号は筠庭^{いんてい}・筠居・静斎・静園・静々舎など。
- (3) 『嬉遊笑覧』六四三二ページに拠る。

(4) 原文は左の通り。ただし、旧漢字は新漢字にしてある。

一人頂有懸疣因取涼夜宿廟中神問此何人左右答云賊氣毳者神命取其毳来其人失疣不勝踴躍而出次晚復有疣者来宿于廟神如前問之左右仍以賊毳者对神曰可昨将毳還他人至巨竟負両疣而去。

本文では省略したが、このあと評語が続く。

評云患失之患得是求無益于得也。今読み下しを試みる。「評して云わく。之を失うを患い、之を得るを患う、是得るを益無きに求むるなり」(一) 得一失をあくせく患い患うのはつまらぬことだ、との大意か。

(5) 楊茂謙 唐の高級官僚。清河県の人。開元の初め魏州の刺史、のち桂州都督に左遷されてる。

(6) 『中国古典文学全集』三三巻「歴代随筆集」解説(五六五ページ)に拠る。

(7) 中島悦次校注『宇治拾遺物語』解説 三七五ページ

(8) たとえば第七巻の五「長谷寺參籠ノ男預レ利生」(『今昔物語』本朝仏法部巻第十六第二十七「長谷にまゐりし男、観音の助けによりて富を得たりし語」)では、郷土フエーン島の口承昔話を物語(「火打箱」など)に仕立てたデンマークの大家家ハンス・クリスチャン・アンデルセン(ハンス・クリスティアン・アヌルセン)なみの語りの妙が楽しめる。

このような記載昔話(Buchmarchen)と創作昔話(Kunstmarchen)の間をたゆたう傑作の類例をヨーロッパに求めれば、ヴェネチア人ジョヴァン・フランチェスコ・ストラパローラの『楽しい夜』(Giovanni Francesco Strapalora: Le piacevoli notti)や、ナポリ人ジャンバッティスタ・バジレの『お話の白眉』別名『五日物語』(Giambattista Basile: Lo cunto de li cunti (Pentameron))だが、これらが世に出たのはそれぞれ漸く十六世紀、十七世紀である。

(9) 佐藤謙三校注『今昔物語集』本朝仏法部上巻 角川文庫 四〇一ページ—四〇三ページ

(10) 岩淵匡編『醒睡笑』静嘉堂文庫蔵 本文編〔改訂版〕

〔イ〕七ページ四行—三行

〔ロ〕一三八ページ—一九行—三九ページ九行

〔ハ〕一四四ページ—〇行—四行

(11) 「目の上の瘤(「たん瘤」)『日本国語大辞典』(小学館)〔第十二巻〕の記述によれば、

「目の上の瘤」(「たん瘤」) 自分より力が上で、何かと目ざわり、何かと邪魔になるものだとえ。また、単に邪魔なものをいう場合もある。」として、出典を挙げている。そのうちで最も古い年代のものは、『玉麈抄』(二五六—二五七)五四。「目の上のこぶをとつてのけたと云たやうなことぞ」。

(12) 関山和夫『安楽庵策伝——咄の系譜』の数力所の教えによる。この書はかつて生若な論者の蒙を著しく啓いてくれた。

- (13) 関敬吾『日本昔話大成』第四卷 本格昔話三 二五八—二七二ページ 「瘤取り」
- (14) 関敬吾監修・崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』一九八—二〇〇ページ
- (15) トケビ「なまりではトカビともいう。日本の鬼に全く似たものだといえないが、妖まじかしの小鬼に似ている。トケビの正体は、昔話に登場する場合は小鬼の姿をして、貧しい者を富まし強欲を懲らしめなどが、世間話では、ほうきが人間に化けたり、火のかたまりが女性に化けたりしたものに人間が化かされた場合も、トケビに惚れたという」(関敬吾監修・崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』一三一—三三二ページ 注一)。
- (16) 「つぶとりじい」斉藤君子編訳『シベリア民話集』二二七—二二八ページ
- (17) Bolte/Poltka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Bd. III 324-328
- (18) トーマス・バーネル Thomas Parrell 一六七九—一七一八。アイルランドの詩人、エッセイスト。アレクサンダー・ポープの友人。十八世紀の代表的文人。
- (19) ロビン・ケッドフェロー 悪戯好きのブラウニー (Brownie) に似た妖精。パック (Puck) またはホブゴブリン (Hobgoblin) とも呼ばれる。シェクスピアの『真夏の夜の夢』の主役の一人。パックは、悪ふざけ、変身、夜旅する者を迷わせる、ミルクを酸敗させてしまふ、若い娘たちを怖がらせる、もったいぶった老婦人がたをつまづかせてひっくりかえす、といったのが自慢の芸。アイルランドのプーカ (pooka, pooka) は同類の家に住みつく妖精。大意は The New Encyclopaedia Britannica. V.9 にある。
- (20) Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm.

参考文献一覽

〔欧文〕

- Aarne, Antti/Thompson, Stith: The Types of the Folktales. FF184. Helsinki. 1964
- Bolte, Johannes/ Poltka, Georg: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Georg Olms. 1963
- Grimm, Jacob und Wilhelm: Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1967.

〔邦文〕

岩淵匡編『醒睡笑 静嘉堂文庫藏 本文編〔改訂版〕』笠間書院 平成十二年改訂版第一刷

金田鬼一訳『完訳 グリム童話集』全五巻 岩波書店 一九八一年第一刷

喜多村信節『嬉遊笑覧』日本随筆大成編集部編 緑園書房 昭和三十三年

斉藤君子編訳『シベリア民話集』岩波文庫 一九八八年第一刷 一九九七年第二刷

佐藤謙三校注『今昔物語集』本朝仏法部上下巻 角川文庫 昭和六一年 十八版

関敬吾『日本昔話大成』（全十二巻のうち）第四巻 本格昔話三 角川書店 昭和五三年初版

関敬吾／川端豊彦訳『完訳 グリム童話』全三巻 角川文庫 平成十一年

関敬吾監修・崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会 昭和四九年第一刷

関山和夫『安楽庵策伝咄の系譜』青蛙房 昭和四二年初版

孫晋泰『朝鮮の民話』民俗民芸双書七 岩崎美術社 一九六八年

中島悦次校注『宇治拾遺物語』角川文庫 昭和三五年初版 平成五年三〇刷

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』第十二巻 小学館 二〇〇二年

正宗敦夫編纂・校訂『古今著聞集』現代思潮社 一九八三年

松枝茂夫（訳者代表）『歴代随筆集』（『中国古典文学全集』三三二巻）平凡社 昭和三七年再版

諸橋轍二『大漢和辞典 縮写版』巻八 大修館書店 昭和四二年第一刷

（二〇〇二年十二月十七日 受理）